



覗く眼

第10回

屋敷の玄関をくぐると、いきなり源治が予想していない事が起きた。先頭にいた八代は屋敷の中に上がらず、玄関わきの壁に手をかけた。すると壁は回転し、そこから先は地下へと続く空洞が広がっている。壁に見せかけた、隠し扉だったのだ。

「玄関の横がいきなり地下室とは、珍しいもんですな」

「大内さん、もうとぼけるのは止めましょうよ」

源治はまだ化かし合いにのっている言い方をしたが、八代の方ではもうとっくに、そんな事は終わっていたのだ。

「すっかり、すべてを見せる覚悟はできているという訳ですな」

源治の言葉は、自分自身に対する引き締めである。相手の屋敷の中にまで入った。向こうももはや小細工などする気はない。源治の不安も、大きくなっている。

源治は胸のあたりを、隙を見て探る。携帯している拳銃の位置を確かめ直したのだ。射撃がそう得意な訳ではないが、いざとなったらこれしか頼るものはない。拳銃に触れた後、返す手を胸のあたりにもあてた。小さな、ふくらみがあった。娘から貰ったお守りを、首から下げているのだ。それは危険な場所に赴こうとする源治の心の方を鎮める、今は唯一の拠り所だった。

階段が終わると、平地の通路のような場所に着いた。自然なものか人工的に掘ったのかはわからないが、広めの洞窟のようなつくりになっている。いずれにしても電気が通っていて明るい事から、人の手が入っている事は確かだ。

「ここは？」

良いタイミングとばかりに、源治が尋ねた。

「この先に、お目当てのモノがありますよ」

はて、目当てのモノとは何であろうか？ それはあの包帯の男でしかあり得ない。けれども、八代はそれをぞんざいとも言えるように言う。あの男がここの二男という事も、もしかすると嘘なのかもしれない。

促され、少し進んだ所だった。源治は二回目の遭遇を、果たした。やはりそこに立っていたのは、あの異常な痩身に、顔には包帯をぐるぐる巻きにした男、佐倉の若様とされるこの家の二男、佐倉昇だった。

源治は相手の出方がわからずにしばらく言葉を失っていたが、ようやく口を開いた。

「何でえ、容疑者を引き渡してくれるのかい？」

脈拍が異常なほど早くなっているのを感じながら、それでも源治は平静を装いながら、皮肉たっぷりの言い方をした。

「容疑者ねえ・・・」

八代はもったいぶった言い方をする。

「でもそれには、証拠がいるでしょう？」

「そりゃあ、そうだな」

源治はここから相手がどういう出方をするのかを訝しんだが、八代の口から続いたのは思いもかけぬ言葉だった。

「お見せしますよ」

そして八代はなめるように源治を見ると、胸のあたりに視線を止めた。

「大内さん。今日、ピストルはお持ちですね」

「ああ」

源治は警戒した。何しろ今はたった一つ、自分を守る道具だ。

「あの男に向かって、構えてみてください」

また八代は、予期せぬ事を口にする。

「良いのかい。この家の大事な、息子さんだろう？」

「こいつは、そんなモノじゃありませんよ」

八代は呆気なく否定した。

「じゃあコイツは、何者でい」

「ですから、ピストルを構えてみればわかりますよ」

源治はきつめに言葉を投げるが、八代は少しも怯まない。このあたりは警察の同僚などより、よほど胆が据わっていると源治はおかしな感心までしてしまう。

「さあ、早く」

源治は胸から拳銃を取り出した。躊躇っていても、事態は進まない。ここまで来たのも、自分で決めた事だ。源治は言われた通り、拳銃を男に向かって構えた。

「これで、良いのかい？」

横を見ると、八代が満足そうに頷いている。犯罪に加担している人間の言われるがままに、犯人らしき人間に向かい銃を構えている。源治はこの皮肉な行為をしている自分に、腹が立つ。

「さあ、引き金をひいてください」

「何だとお？」

構えるだけならまだしも、引き金をひくという事は相手を殺傷しろと言う事だ。

「どこを狙えて言うんだ？」

「頭なり、心臓なり、ご自由に」

やはり威嚇ではなく、あの男そのものを撃つように八代は促しているのだ。

「あいつが何者かはわからねえが、おまえらの仲間だろ？」

「ご安心ください。もしもの事があつたって、罪なんかもみ消す事ができる」

八代は源治の意図を正確に理解していた。これは正当防衛なのか？ 過失として処理されてしまうのか？ いやそれよりも、殺人を積極的におこすなど、したくはない。

「上さえ押さえておけば、罪なんて消せるものですからね」

八代のこの言葉が、ダメ押しになった。源治の頭にこれまで握りつぶされてきた事件のいくつかが、過る。

「戦時中を、思い出すぜ」

終戦から二十年。思い出してはならないはずの思いを、源治は無理やり記憶の底から引き出す

。

「何て言って撃ちや、良いんだい？」

「何なりと。いつでも引き金をひいて、結構ですよ」

「へっ、馬鹿にしてやがる」

射撃はそう、得意ではない。けれどもそれは、訓練での話だ。自分は戦争という極限の実戦の中で、引き金をひいてきた。今の源治は刑事なのか兵隊なのか。自分でもよくわからない。わかつては耐えられないのだ。既にここは、まともな状態では無い。

源治は指先に意識を向けた。時間にすれば秒単位以下で引き金はひかれ、銃の弾は放たれる。けれどもその刹那、目の前の男の姿を見失った。かと思うと、自分の鼻先に男のあの包帯でぐるぐるに巻いた顔があった。源治は至近距離で、あの異形の眼の光を見た。

源治の真っ白になった頭に意識が戻ってくるに従い、源治は構えた銃へと眼を移した。引き金をひいた記憶はない。確かに、弾も放たれてはいなかった。けれどもそれを確かめる前に、源治は恐怖で凍りついた。背中にひんやりとしたざわつきがはしり、冷たい汗となる。

源治の右腕、銃を構えたその手首には、鎌がつきつけられていた。後数センチ動かせば、間違いなく源治の銃を持った手首は切り落とされていた。文字通り、寸止め。しかもこの異形の男は、目にも止まらぬ速さで離れた位置からやって来て、この神技を成し遂げたのだ。源治は恐怖とともに、そうした疑問がわきあがり、パニックに陥っている。蛇に睨まれた蛙であったならば、恐怖だけで済むのだろうに。感情を持つ人間というのは、何と悲しい生き物だろう。